



ベストティーチャーに聴く 授業の工夫⑧

鹿児島大学 FD 委員会

【発行／2022年12月】

大学院医歯学総合研究科(医学系)
准教授 吉満 誠



医学知識と医療のギャップを埋める臨床実習を目指して

1 系統講義

系統講義は少ないコマ数で多くの情報を伝えるため過猶不及にしばしばなってしまいます。医学講義をする者にはキュレーター役があります。なぜこの情報が臨床的に重要なのか、なぜ医学的に興味深いのかを説明できないようなものは極力割愛いたします。特に暗記だけの部分は国家試験重点部分だけにします。ただ実際の国家試験の問題を見せながら講義をすると学生の目が一瞬で輝きますのでお勧めです。



2 医学知識と実習のギャップ

学生は最初の約4年間かけてさまざまな医学の知識を学べます。その量は膨大です。専門外の内容については学生の方がよく知っていますね。さらに近年の体系的な臨床実習前教育により臨床実習生の問診、診察スキルは格段に向上していることは実感されていると思います。ところが実際の臨床実習では、これまで

習得した知識とスキルをどのように活かしていいか、どのように参加していいかわからないようです。診療参加型実習の重要性が叫ばれて久しいですが、どのように参加するのは十分に教えられていない気がします。このことには留意していた方がいいと思っています。

3 診療参加型実習のスタートラインに立つための診療録記載

理想の内科の診療参加型実習の一例は『朝一番で担当患者の情報収集、問題点を抽出、アセスメントをしてプランをたて指導医に提示、ディスカッションを行いその日の予定を立てていく』です。シンプルですがなかなかハードルが高く感じるようです。それを乗り越えるための方略として、臨床実習では、まず診療録記載について指導いたします。実習初日に前グループの学生が記載した診療録を見せると、ほとんどの学生が、

すごいといいます。なぜすごいと思うのかと質問しますと、たいして読んでもいないのに『それっぽく書いているから』というのです。その通りです。『それっぽく書いている』=『型』だということに気づいてもらい、その『型』の解説をしてきます。実際に担当症例に関して『型』に沿って診療録を記載すると、これまで習得してきた知識と診察スキルなどが『型』のどこに活用できるか実感できます。プレゼンも同じですね。

4 臨床の難しさを実感する

当たり前ですが国家試験の臨床問題は、一つの解答を導き出すための必要十分な情報が問題本文に記載されており、ところが日常診療では答えのないことばかりです。診療録で『型』通りにプロブレムリストを作り、アセスメントしてみることで、これまで漠然と難しいと想像していたものを、初めてリアルに難しいと感じても

らいます。ただしここにも『型』があります。プロブレム解決の手段の一例として Up-to-date などの活用法も実際の担当症例を通じて説明していきます。記載した診療録の添削により学生毎の理解度を細かく把握することができ、到達度に合わせた指導が容易となります。時間的なレバレッジが効いてお勧めです。

5 おわりに

医学教育に関わることができるのは大変幸運なことだと感じております。スタートラインにたった診療参加型実習をより進化できるよう取り組んでまいりたいと思います。

21号

22号

23号

24号

25号

26号

27号

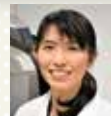
28号

29号

30号

ベストティーチャーに聴く授業の工夫⑧

農学部
助教 坂尾 こそ枝



1 講義を通して伝えたいこと

「研究室に配属してから必要になる知識をわかりやすく学ぶことが出来ました」

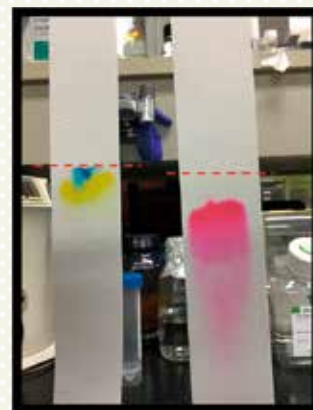
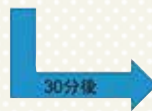
この学生アンケートのコメントを目にした瞬間、講義で一番大切にしてきたことが伝わったと、安堵と喜びを感じました。

私は、学部3年生の前期専門科目「分子食品学」を担当

させて頂いております。私たちの学科では、3年生は後期から各研究室に配属され、本格的な研究活動に携わることになっています。そこで、座学を通し、後期から始まる研究活動が如何に楽しく、如何に“失敗する可能性”に満ちているかを、出来るだけ身近に感じてもらう講義の構築を目指しています。

2 実際の研究活動の状態に近づける

研究活動が開始されたときに少しでも「講義で見た!」と思い出してもらうために、講義中に実際の研究で使用している実験器具を直接見て触る機会を設けたり、簡単な実験を目の前で披露したりなど行っています。また、機械など持って運べないものや、実験上のコツなどについては、私の研究室に所属している学生たちに機械操作や実験を実演してもらい、それらを動画にして講義中に視聴できる形にしています。



3 研究室の出来事を講義内容に反映する

講義の主軸の一つとして研究室の“歴代の”学生たちによる実験にまつわる失敗談を中心に資料を作成しています。なぜ実験が失敗したのか、どうしたら成功したのか、研究室の学生たちと試行錯誤しながら進めていく日々の研究を通して、学生たちにとって理解しづらい部分を洗い出し、また、私自身が気付かされた盲点などを盛り込んだ講義資料です。いわば私たちの研究室で実際に起きた数々

の失敗に対するトラブルシューティング集とも言えるかもしれません。それを用い、講義では、まず基礎的な操作、原理を教え、次に実施例を紹介します。その後、失敗例をミニ課題として提示します。自分の実験で得たデータと仮定してもらい、改善点などを自分たちで調べたり考えたりしてもらい、次回の講義で解答例と共に解決法を答えるようにしています。

4 最後に

上述しました点を中心に、後期からの研究活動で直接的・間接的に使える知識や技量、調べ方や考え方を学んでもらえるようにしています。このようにして、初めて見る装置や実験の操作も臆することなく挑み、楽しみ、たとえ失敗しても焦らず対処できる、その度量を事前に少しでも養ってもらうことを念頭に置き続けて講義を進めています。そのために、講義内容のブラッシュアップにおいて

も学生たちに意見を求めることも多く、その都度、学生たちの“最新の”分からない]が分かるようになったと思います。

これからも学生たちの「分からない」に興味を持ち続け、様々な失敗例を講義の資料に反映し、より良い授業を創っていけるよう、学生共々、失敗から学び続けて行こうと考えております。